

昔、天竺に僧伽多きやたといふ人あり。五百人の商人を舟に乗せて、かねの津へ行くに、にはかに悪しき風吹きて、舟を南の方へ吹きもて行く事、矢を射るがごとし。知らぬ世界に吹き寄せられて、陸に寄りたるを、かしこき事にして、左右ひだりみぎなくみな惑ひおりぬ。暫しばばかりありて、いみじくをかしげなる女房十人ばかり出でて来て、歌をうたひて渡る。知らぬ世界に来て、心細く覚えつるに、かかるめでたき女どもを見つけて、悦びて呼び寄す。呼ばれて寄り来ぬ。近まさりして、らうたき事物にも似ず。五百人の商人目をつけて、めでたがる事限りなし。

商人、女に問うて曰く、「我ら宝を求めんために出でにしに、悪しき風にあひて、知らぬ世界に來たり。堪へ難く思ふ間に、人々の御有様を見るに、愁うれひの心みな失せぬ。今はすみやかに具しておはして、我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば、歸るべきやうなし」といへば、この女ども、「さらば、いざせ給へ」といひて、前に立ち導きて行く。家に着きて見れば、白く高き築地を、遠く築きまはして、門をいかめしく立てたり。その内に具して入りぬ。門の錠をやがてさしつ。内に入りて見れば、さまざまの屋ども隔て隔て作りたり。男一人もなし。

さて商人ども、皆々とりどりに妻にして住む。かたみに思ひあふ事限なし。片時も離るべき心地せずして住む間、この女、日ごとに昼寝をする事久し。顔をかしげながら、寝入るたびに少しけうとく見ゆ。僧伽多、このけうとくを見て、心得ず怪しく覚えければ、やはら起きて、方々を見れば、さまざまの隔て隔てあり。ここに一つの隔てあり。築地を高く築きめぐらしたり。戸に錠を強くさしり。そばより登りて内を見れば、人多くあり。あるいは死に、あるいはうによふ声す。また白き屍、赤き屍多くあり。僧伽多、一人の生きたる人を招き寄せて、「これはいかなる人の、かくてはあるぞ」と問ふに、答えて曰く、「我は南天竺の者なり。商のために海を歩きしに、悪しき風に放たれて、この嶋に來たれば、世にめでたげなる女どもにたばかられて、帰らん事も忘れて住む程に、産みと産む子は、みな女なり。限なく思ひて住む程に、また異商人舟、より来ぬれば、もとの男をば、かくのごとくして、日々の食にあつるなり。御身どももまた舟来なば、かかる目をこそは見給はめ。いかにもして、とくとく逃げ給へ。この鬼は、昼三時ばかりは昼寝をするなり。この間よく逃げば逃ぐべきなり。この築かれたる四方は、鉄にて固めたり。我、よをろ筋を断たれたれば、逃ぐべきやうなし」と、泣く泣くいひければ、「怪しとは思ひつるに」とて、歸りて、残の商人どもに、この由を語るに、皆あきれ惑ひて、女の寝たる隙に僧伽多を始めとして、浜へみな行きぬ。

遙に補陀落世界の方へ向ひて、もろともに声あげて、観音を念じけるに、沖の方より大なる白馬、波の上を泳ぎて、商人らが前に来て、うつぶしに伏しぬ。これ念じ参らす験なりと思ひて、ある限みな取りつきて乗りぬ。さて女どもは寝起きて見るに、男ども一人もなし。「逃げぬるにこそ」とて、ある限り浜へ出でて見れば、男みな茸毛なる馬に乗りて、海を渡りて行く。女ども、たちまちにたけ一丈ばかりの鬼になりて、一四五丈高くをどり上りて、叫びののしるに、この商人の中に、女の世にありがたかりし事を思ひ出づる者、一人ありけるが、取りはづして海に落ち入りぬ。羅刹らせつ奪ひしらがひて、これを破り食ひけり。さてこの馬は、南天竺の西の浜にいたりて伏せりぬ。商人ども悦びておりぬ。その馬かき消つやうに失せぬ。

僧伽多深く恐ろしと思ひて、この国に來て後、この事を人に語らず。

二年を経て、この羅刹女の中に、僧伽多が妻にてありし、僧伽多が家に來たりぬ。見しよりもな

ほいみじくめでたくなりて、いはん方なく美しく、僧伽多にいふやう、「君をばさるべき昔の契にや、殊に睦ましく思ひしに、かく捨てて逃げ給へるは、いかに思すにか。我が国にはかかるもの時々出て来て、人を食ふなり。されば錠をよくさし、築地を高く築きたるなり。それに、かく人の多く浜に出てののしる声を聞きて、かの鬼どもの来て、怒れるさまを見せて侍りしなり。敢へて我らがしわざにあらず。帰り給ひて後、あまりに恋しく悲しく覚えて。殿は同じ心にも思さぬにや」とて、さめざめと泣く。おぼろげの人の心には、さもやと思ひぬべし。されども僧伽多大に瞋りて、太刀を抜きて殺さんとす。限なく恨みて、僧伽多が家を出でて、内裏に参りて申すやう、「僧伽多は我が年比の夫なり。それに我を捨てて住まぬ事は、誰にかは訴へ申し候はん。帝皇これをおもんばかり理り給へ」と申すに、公卿、殿上人これを見て、限なくめで惑はぬ人なし。帝聞し召して、覗きて御覽するに、いはん方なく美し。そこぼくの女御、后を御覽じ比ぶるに、みな土くれのごとし。これは玉のごとし。かかる者に住まぬ僧伽多が心いかならんと、思し召しければ、僧伽多を召しければ、僧伽多を召して問はせ給ふに、僧伽多申すやう、「これは、更に御内へ入れ見るべき者にあらず。返す返す恐ろしき者なり。ゆゆしき僻事ひが出で来候はんず」と申して出でぬ。

帝この由聞し召して、「この僧伽多はいひがひなき者かな。よしよし、後の方より入れよ」と、藏人して仰せられければ、夕暮方に参らせつ。帝近く召して御覽するに、けはひ、姿、みめ有様、香ばしく懐かしき事限なし。さて二人臥させ給ひて後、二日三日まで起きあがり給はず、世の政をも知らせ給はず。僧伽多参りて、「ゆゆしき事出で来たりなんす。あさましきわざかな。これはすみやかに殺され給ひぬる」と申せども、耳に聞き入るる人なし。かくて三日になりぬる朝、御格子もいまだあがらぬに、この夜の御殿より出でて、立てるを見れば、まみも変りて、世に恐ろしげなり。口に血つきたり。「暫し世中を見まはして、軒より飛ぶがごとくして、雲に入りて失せぬ。人人この由申さんとて、夜の御殿に参りたれば、赤き首一つ残れり。その外は物なし。さて宮の内、ののしる事たとへん事なし。臣下、男女泣き悲しむ事限なし。

御子の春宮、やがて位につき給ひぬ。僧伽多を召して、事の次第を召し問はるるに、僧伽多申すやう、「さ候へばこそ、かかるものにて候へば、すみやかに追ひ出さるべきやうを申しつるなり、今は宣旨を蒙つて、これを討ちて参らせん」と申すに、「申さんままだ仰せ給たべし」とありければ、「劍の太刀はきて候はん兵百人、弓矢帯したる百人、早舟に乗りて出し立てらるべし」と申しければ、そのままに出し立てられぬ。僧伽多この軍兵を具して、かの羅刹の嶋へ漕ぎ行きつつ、まづ商人のやうなる者を、十人ばかり浜におろしたるに、例のごとく玉女ども、うたひを謡ひて来て、商人をいざなひて、女の城へ入りぬ。その尻に立ちて二百人の兵乱れ入りて、この女どもを打ち斬り、射るに、暫しは恨みたるさまにて、あはれげなる気色を見せけれども、僧伽多大なる声を放ちて、走りまはつて掟てければ、その時、鬼の姿になりて、大口をあきてかかりけれども、太刀にて頭をわり、手足打ち斬りなどしければ、空を飛びて逃ぐるをば、弓にて射落しつ。一人も残る者なし。家には火をかけて焼き払ひつ。むなしき国となして果てつ。さて帰りて、おほやけにこの由申しければ、僧伽多にやがてこの国を賜ひつ。二百人の軍兵を具して、その国にぞ住みける。いみじくたのしかりけり。今は僧伽多が子孫、かの国の主にてありとなん申し伝へたる。